

界隈

特集

岩原太郎^[文]
text : Iwabara Taro
東昇^[写真]
photo : Azuma Noboru

旅行者たちの聖地

タイの首都バンコク。王宮北側のバンランプーという地区に、300メートルほどの東西に伸びる通りがある。儉約型の旅行者の間では以前から世界的に有名な「た、カオサンロード」である。

本来、「カオサン」は一本の通りの名に過ぎなかったが、外国人旅行者が増加し通りに面したお店が飽和状態になると、通りを中心とした半径300mほどのエリアに安宿やレストランが続々とオープンし始め、あっという間に外国人エリアが広がっていった。やがて通りだけでなくその周辺も含めたエリア全体がカオサンと呼ばれるようになる。

カオサン界隈には地元住民の10倍とも50倍ともいわれる数の外国人が集まり、とてもここがタイだとは思えないほど国際色豊かな光景が繰り広げられている。ここには1泊20バーツ〜1バーツ約3円)から泊れるゲストハウスと呼ばれる安宿を始め、チケットが格安で手配できる旅行代理店、中古ガイドブックなどを売る古本屋、コンビニや散髪屋、国際送金が短時間で受取可能な銀行、両替屋、1時間90円の格安インターネット屋、国際電話屋などが乱立している。

ドムアン国際空港に降り立った旅行者たちが、まずカオサンに向かうのは、カオ



豹変するバンコクの安宿街

カオサン

サンがここに滞在すればすべてが事足りる便利な魅力的な場所だからだ。それはカオサンが「旅行者の聖地」といわれる所以でもある。

早期のカオサン

そもそもカオサンに宿屋街が形成され始めたのは、1960年代初め頃に中規模のビエンタイホテルがオープンした後のことである。それ以前にも商人宿のようなものはあったそうだが、今のような外国人のためのエリアではなかった。カオサンとはタイ語で「米問屋」のこと。文字通り、カオサンは米問屋が立ち並び商人の通りであった。

その後、チャイナタウン周辺の旅社と呼ばれる華僑系の安宿に泊っていた旅行者などがカオサンに宿替えをして、徐々に外国人が増えていった。なぜカオサンに旅行者が集まったかという点、王宮などの観光スポットが近くに点在し地理的に好条件であったという理由もあるのだが、それ以外に、大麻などの麻薬類が手に入りやすかった、というのが理由のひとつだったといえる。それら違法な品々の販売をセトルスポイントとしている安宿もあり、真昼間から堂々と大麻を吸っている外国人がいるのが当たり前のようにならっていた。つまりカオサンは普通のタイ



近年、女性旅行者が増えた

人なら敬遠するダークな場所だったのである。タイ人にどこに泊まっているのと聞かれて「カオサン」と答えると、「危ないからちゃんとしたホテルに泊りなさい」と忠告を受けたり、いやな顔をされたりすることもあった。

観光地化するカオサン

現在のように純粹に旅を目的とする外国人が大部分を占めるようになったのは90年代中頃のことである。彼らは王宮や日本では隣の寺と呼ばれているワットアルンなどの有名観光スポットに近く、安い宿泊旅行会社が集まっているなど、観光に便利なことを主な理由に集まってきた健全な旅行者たちだった。やがて、通りには旅行者相手のお店が乱立

するようになり、現在のカオサンが形成されていった。

一人旅をしている日本人の姿がカオサンで多く見られるようになったのは、お笑いコンビがヒッチハイクをしながらヨーロッパに向かう、という日本のテレビ番組が放送された後のことだ。

カオサンを含め、タイ南部の島々とバックパッカー（儉約型旅行者。本来は背中に荷物を背負った旅行者の意を題材としたレオナルド・デカプリオ主演の『ザ・ビーチ』の公開も多大な影響をカオサンに及ぼした。この映画はアメリカ、ヨーロッパでヒットし、欧米人旅行者もまたカオサンを経由して舞台となった南部の島へ押しかけるようになったのだ。

現在は、毎夜ツアーバスが通りの入り口に停まり、バスからぞろぞろと欧米人観光客が降りてくる光景が見られる。『カオサン見学ツアー』である。ツアーパッケージにカオサン見学が組み込まれ、カオサンは世界的な観光地にもなったのである。カオサンがダークな灰色のイメージからカフルで明るい場所になった証だといえるだろう。

バブル景気に沸く

今、カオサンが大ブームになっている。外国人旅行者たちではなく、「ワイル

ド」本来はハイティーンの意」といわれる20歳前後の若いタイ人たちがカオサンに外国人が多いお洒落な場所、という構図が彼らにはあるのだろう。

酒場の終日営業は青少年に悪影響を及ぼすというので、政府が酒場の営業を深夜2時までで制限したため、今では夜通し遊ぶことはできなくなったが、以前は旅行者相手の24時間営業のレストランも多くあり、夜が明けるまで安く飲むことができる場所として有名だった。

そして、タイ人が増えるにつれ、通りに面しているお店は次々と改装を行い、お洒落なレストランやパブ、そしてクラブが登場し、テレビの人気ドラマのロケ地になったり、人気歌手のプロモーションにまで出てきたりと、カオサンの名はタイ中に知れわたり、タイで最も有名なナイトスポットになっていったのである。

もちろんそれらのお店はどこも値上げしたが、客が減るかと思えば逆に値段の高い店ほどはやるという現象が起こった。タイ人は、目の前にお金はずべて使ってしまう、貯金をしない」とよくいわれるが、この光景を見てみるとそれもうなずける。アジア経済危機以降、経済を動かしている人々はまだまだ苦しんでいるのに若者が集まるカオサン通りはバブルの絶頂と見ていいだろう。さすがに給料日前になると客足が落ちるよ

うだが、それでも連日連夜、この通りは縁日のごときにぎわいを見せている。

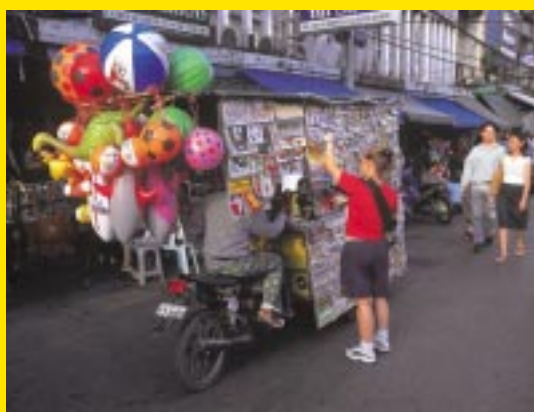
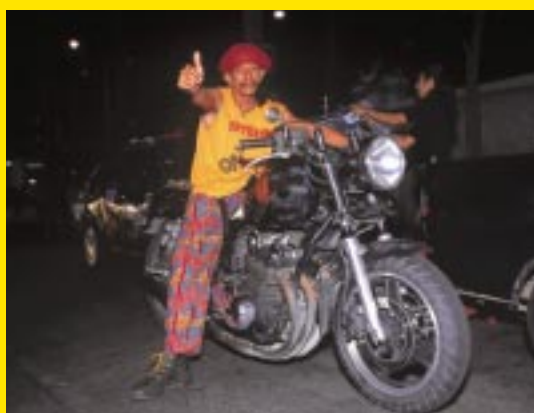
外国人ドーナツ化現象

ワイルンたちが押し寄せるカオサンに儉約型旅行者たちの居場所がなくなっているのも事実だ。旅行者たちが毎日そんなに高いレストランで食べられるはずがない。そこで、世界中を旅するしぶとい旅行者たちは、その居場所をカオサンの周辺部へと替え始めた。周辺に雰囲気のないちよつと小洒落たゲストハウスが建設され、カオサン通り北側のランブトリーという裏通り帯には、テーブルを並べた安い食べ物屋台が立ち並び、麺類やご飯類、焼鳥や焼魚など、酒の肴が安



かなり目立っていた日本人旅行者

- 【右上】路上の髪結屋。お坊さんは見学中？
- 【右下】シーク教徒の旅行代理店スタッフ
- 【左上】屋台のカクテルバー。パーテンはおカマちゃん
- 【左中】夜な夜な徘徊するタイ人のバイカー
- 【左下】バックバックに貼るワッペンを売るバイク屋台





【右上】路地裏に残る昔ながらの下町風情

【左上】高級目な店ほどタイ人客比率が高い



ถนนข้าวสาร

く食べられ、ビールもコンビニ並みの安さで飲める。今やカオサン通りよりも周辺部の方が、外国人密度が高くなっているのだ。カオサン外国人分布ドーナツ化現象とじていいだろう。

「さらばカオサン通り！ 我々はここで安ビールで乾杯だ」と、外国人旅行者みんなが思っているわけではないだろうが、そう思っている連中が少なからずいるに違いない。

しかし、カオサン通りを占領しているワイルドたちは非常にあきやすい。バンコクでは過去にもさまざまなナイトスポットが注目を浴びてきたが、それらはどこも2〜3年ほどであきらめ、現在は開古鳥が鳴いている。パブルが弾けた直後と同じ状況だ。カオサンもそのようになつてしまいかもれない。まあ、その時はまた、しぶとい旅行者たちがカオサンを占拠するだろう。

それぞれのカオサン

カオサンはタイのみならずアジア旅行の中継地として八つの役割をはたしている。ここではさまざまな旅行者が見受けられるが、ここ数年、一人旅をする若い女性が急増傾向にある。

まず、男女の比率であるが、一昔前までは男性が9として女性が1くらいで

あったのが、徐々に女性が増加し、現在カオサンを見ていると、男性6に対し女性が4くらいの比率になっているようである。しかも、ごく普通の女の子たちが多くなってきたように感じられる。数年前には顔黒化粧をした日本人の女の子がカオサンを闊歩しているのに遭遇したこともあった。

なぜ、「普通の」を強調するかというと、以前の女性旅行者たちといえは、アフリカのある国で、移動手段が全くないので2週間かけて国の端から端まで何百キロも歩いて横断したとか、「入国期間を延長するために、入国スタンプの日付をボールペンを使って自分で書き換えた」など、男顔負けの武勇伝を語る筋金入りの女性が多かったからである。その当時の女の子たちと比べてしまうと、いまカオサンを訪れる女の子たちはごく普通といえるのである。

しかし、今の女性たちも積極的に行動する。市内観光もそうだが次の目的地への移動も速い。一カ所あたりの滞在期間は男性旅行者の半分以下だろう。ベッドに横たわっている時間も男性よりずっと短いように見える。男性はなんだかんだとカオサンに腰を落着けてしまいい、10日程度は滞在してのんびりしている者が多いが、女性で5日も連泊するのは長い方である。まして10連泊などと

いづつかなり珍しい存在になる。

カオサンの女性旅行者を見る限り、男性よりもかなり欲張った無理のある旅行日程を組んでいるようだのんびり観光をする旅ではなく、まるである期間内にどれだけたくさん場所に行けるかを競っているかのようにならざるを得ない旅をするのである。男性と女性の旅の仕方の違いがはつきりわかる。

また、最近ではカオサンを訪れる旅行者の年齢層もずいぶん広がってきた。中高年の旅行者が年の離れた若者と同一テーブルに座り楽しそうに旅談義をしている光景がよく見かけられるようになったのである。カオサンの変貌はメディアの影響によるところが大きいと考えられるが、年金で旅をするリタイア組、日本で仕事を失ったリストラ組、逃避行しているような旅行者などが目立つようになったのは、社会環境の変化

や不況による影響が少なからずあるようだ。カオサンは日本に比べ物価も安く、比較的安全であり、日本人経営の店も増えて、安い日本食も食べられる。中高年の旅行者にとつて、カオサンはその気になれば英語やタイ語を全く使わず日本語だけで滞在できる快適なところになっている。

もちろん若い世代の旅行者たちもそれぞれカオサンというところを有効に使っている。ある者は安いチケットを求め、ある者は日本食が恋しくなるとか、旅の途中でカオサンまで取りあえず撤退し、ある者はいつしよに旅をしてくれそうな可愛い女の子が現れるのを何日も網を張って待っていたりと、各人各様の楽しみ方をしていているようだ。今後ますますさまざまな旅行者がそれぞれ思いで旅行者たちの聖地・カオサンを訪れることだろう。

概要

バンコク観光では必見ともいえる王宮やワット・プラケオに近く、チャオプラヤ川の船着き場へも徒歩数分の距離。物価も他の観光エリアに比べればかなり安い。夜は連日縁日のようににぎわいなので、貧乏旅行者ならずともカオサンエリアに泊まるメリットは大きい。食事に関しては何ぶん予算のない客を当て込んでいるので、高級志向の人には少々物足りないかもしれないが、世界各地の料理が安価で食べられるので、小鳥食いしながらいろんな店をはしごするのは楽しい。

行き方

タクシー運転手に「カオサン」と伝えれば、少々発音が悪くてもまずわかってもらえる。ドムアン空港からタクシーで行く場合は300バーツ程度(空港発特別チャージ、高速代込み)、2番のエアポートバスでも行ける。渋滞の程度により所要時間は30分から1時間半ぐらいで、運賃100バーツ。

ホテル

大多数は安宿だが、中級ホテルも数件ある。

Buddy Lodge

265 Kaosan Rd., tel : 02-629-4477

近年オープンしたカオサン・ロードに面したプチホテル。

Viengtai Hotel

42 Rambutri Rd., tel : 02-280-5434

このエリアでは老舗のホテル。

ถนนข้าวสาร



安宿の薦め

サラリーマンのバックパッカーが「リマン・バック」と呼ばれているのをこぞ存じず。か。リマン・バックの多くは若い時に海外貧乏旅行の楽しさが忘れられず、経済的に余裕があっても、ついバックパックを背負って儉約型の旅行をしてしまおうという人たちです。実は私もそんなリマン・バックの一人。たまには学生時代を思い出して安宿に泊まってみるのも楽しいものです。

ホテルもどき：安宿といっても最近では、エアコン、バスタブ、電話、衛星放送受信可能なテレビ付きという少し狭い点を除けば観光ホテル並みの所もある。エアコン、お湯シャワー付きの部屋代の相場は300〜600バーツ(1バーツ約3円)。

独房型：カオサン界隈に一番多いタイプで、シャワー、トイレ共同の個室、個室としても薄い板で区切られただけの狭い部屋が

ほとんど窓が無い部屋も多く、エアコンはないのが普通。このタイプはシングルが主で、部屋代は60から250バーツくらいと条件によってかなり開きがある。

ウナギの寝床型：学生寮のような相部屋。2段ベッドの場合が多く、一部屋20人ぐらいの大部屋もある。近年タイでは減少傾向に。ドミトリ(dormitory=共同寝室)を縮めてドミと呼ばれることも多い。相場は40〜100バーツ。

(編集部)



【上】十分快適なホテルもどき。電話、テレビは無し。ダブル495バーツ
【下】独房型としては高級な部類に入る窓つきシングル。160バーツ